

津 軽 方 言 の 研 究

— (「方言研究」考) —

藤 原 与 一

本稿は、津軽方言の研究に従って、かつは、方言研究のありかたを問題にしようとするものである。

目 次

前おき

- 一 日本語方言の北限
- 二 北限の「南部」と「津軽」——太平洋がわと日本海がわ——
- 三 津軽方言
- 四 津軽方言はなぜわかりにくいのか ——津軽方言の特色——
- 五 「音声言語としての方言」の研究
- 六 方言研究の将来

前おき

青森県下の津軽方言は、東北地方の諸方言の中で、もっとも注目にあたいる方言であると思う。「東北方言」中では、津軽方言がいちばん難解ではないか。(他地方人にとっては。)私どもが、東北地方に行って、方言に接する時、北上すればするほど、土地のことばが、聞きとりにくくなる。青森県下まで行く、その聞きとりにくさが、極点に達する。県下でも、東部の、いわゆる「南部方言」よりは、その東部を除く、広い西がわ地域の「津軽方言」の方が、いっそうわかりにくいように思われる。

東北方言の本格的な研究のためには、この津軽方言を深く討究することが必要であろう。東北方言の様相・性格も、本質も成立も、この津軽方言——東北

方言の局限状態を示す津軽方言——の深部究明によって、解明しうるところが多かろう。津軽方言研究は、「東北方言」深部研究の、高次の序段としての意味を持つと思われる。

すでに、東北方言は、日本語諸方言中で、北部の局所に立つ方言である。(北海道方言は特別視してよい。)その特色の、種々に顕著であることは、よく知られている。局所方言、東北方言の研究が、日本語方言の本格的研究の、高次の序段になりうることは明らかであろう。であれば、東北方言研究の高次の序段としうる津軽方言研究は、日本語諸方言総合の本格的研究のためにも、高次の序段となるものと見られるのである。

私は、日本語方言の研究という大きな見地で、津軽方言を観察してみたい。

かんたんに考えてみても、そうせざるを得ないことである。津軽方言は、これだけ異風異様の方言である。同じ日本語方言の中で、ものがこんなに異様であることは、それ自体、日本語方言全体の見地で、重視すべきことにちがいない。

こんな方言もあるゆえ、私どもは、国語研究のために方言を研究しなくてはならないとも言える。

一方から言えば、これだけに特色を持った方言、よそ者には難解な方言——(と言っても、先方の人に解説してもらえば難解でない。また、まとまった表現を要素に分析してもらえば、その要素の一々は難解でない。)——は、現地の人びとが手づから研究するのが理想的でもあろう。が、大きく考えれば、よそ者の私なども、日本語の現地に住む現地人として、日本語の見地から、日本語現地のうちの一地域としての津軽の、その異様の方言を、積極的に観察する必要がある。私どもがこうすることが、日本語研究のために必要であることは明らかであろう。

一 日本語方言の北限

奥羽北部の方言、青森県地方の方言は、日本語方言の北限である。それは、

地域的に北限であることはもちろん、方言状態としても、まさに北限である。

この事實は、奇しくも、鹿児島県地方の方言が、日本語方言の南限であるのと、きれいに対応している。南方には、奄美群島以南の「南島方言」がある。これは日本語方言の特別南限であって、いちおう、特立させることができる。それを除いて、日本語の統一的な方言状態を大観する時、この次元では、奥羽北部と九州南部との、南北二地域の方言状態が、日本語方言上の、あい対立する南限・北限と考えられる。上記二地域方言の対応を見てこそ、南限・北限の考えかたが、一定の意義を有すると考えられるのである。

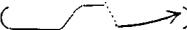
南限、鹿児島県地方の方言は、その古風な文法の多くと、語彙上の特色とによって、異風である。発音上でも異風ではあるが、それは北限の場合ほどではない。北限方言は、発音上のゾーゾー弁その他の特色と、文法上の特色と、語彙上の特色とによって、はなはだしく異風である。

国の南北の両極に異風の状態の見られるのは、方言分化の自然の理の支配するところとして、もっともとうけとることができよう。国の政治・文化の中心部からあいさること遠い地域には、異風の方言の形成されるのが当然である。そういう遠い地域には、中央からの影響の、より古い状況も温存されていれば、また、中央からの影響の外での、自由な変異現象もおこっているからである。

北限方言と南限方言とに、一致の現象の見られることは、また、ことに注目にあたいる。南限方言内に、ゾーゾー弁の発音の聞かれるのは、それが、関西以西では、山陰の特別地域を除き、この南限方言内だけでのことだけに、北限方言との対応上、注目される。文アクセントの、一つのつよい型として、「あと上がり調」とも言うべきものが、北限方言と南限方言とに特にいちじるしいのは、かれこれ合わせて、もっとも注目すべきものであろう。たとえば、南限方言で、

○ゴヤツケサー ナイヤゲモシタ。

御厄介さまになりました。

のように言い(), 北限方言で、

○イ [e] — テンキ [kçi] シ ナツタ ネシ [i] ー。

いい天気になりましたね。

のように言う。〈津軽方言例〉南北双方で、諸種の表現にわたって、こうした「あと上がり調」がよく出る。しかも、この両限の地域を除いては、他に、この両限地域ほどに一定的によく「あと上がり傾向」を見せる所はない。まさに南北両傍での一致の文アクセント傾向である。文法上の事実、「何なにだけれども、」の「バッテン」「バッテ」ことばは、九州肥筑にいちじるしい。ところで、鹿児島県下の南部にも、「バッテ」類が見いだされる。さて、北限方言でも、また、「バッテ」「バテ」の、逆接の接続助詞がおこなわれているのである。(秋田県北部にも見られるけれども。)

○ソンダバッテ、

そうだけれども、

○ソンダバテ ソンデ ナ = [nas] ー。

いちおう、りくつとしてはそうだけれども、じつはそうでない。

などと言う。

いわゆる北限方言と南限方言とは、たがいに隔絶していながら、一致の現象も示しうる両限である。(——それゆえ、これらを両限と見ることも妥当とされる。) おのおの、方言としての自己形成と自己改新とが、中央勢力の直接影響の外で、かなり自由であったがなかに、双方、このような自然偶然の一致も見せるようになってのは、まことに注目すべきことである。こういう、自然一致の契機をも包蔵しつつ、両極地方のおのおのは、それぞれ、局限方言としての渾一的相貌を呈していった。

概して言えば、北限方言は、国の東国方言中では、異色の文法を呈することによって、その北限性を濃厚にするにいたったか。たとえば、これは北限地域でも津軽のことばになるが、

○ソツタ ゴト スレバ マイ [i] ネ。

そんなことしちゃだめだ。

などと、「マイ [i] ネ」の言いかたをする。これが「まに合わない」からきたものとすれば、この言いかたは、東京などの、ご用ぎきなどに答えることば、

○マニ アッテル[↑]ワ。

などという「マニ アッテル」の言いかたと一連のものである。それが津軽では、肯定の言いかたではなくて、否定の「まに合わない」の言いかたで固定しているとすれば、これは、「まに合ってる、合っていない」の言いかたが、北の局限で異色を示したものとされる。このような事実によって、北限方言は、いよいよ特殊性を濃厚にすることになったかと思われる。

二 北限の「南部」と「津軽」

——太平洋がわと日本海がわ——

一口に言えば北限方言であるが、その青森県地域の方言が、大きく、東・西の二方言に分かれる。太平洋がわの「南部方言」と、日本海がわの「津軽方言」とがそれである。

参照 此島正年氏「方言の実態と共通語化の問題点 青森」(方言学講座第二巻 昭和36年3月 東京堂)

この対立は、歴史的風土的に、かなり根の深いものと見られる。土地のひととの区別意識もまた一般に強烈である。中には、両方の気質の相違を説く人もある。南部は鈍重、のんびり、津軽はせっかち、荒っぽいなどと言う。「氷炭あい容れぬ。」とまで言う人もある。なるほど、私どもが、文末の「ナ」という言いかた一つを聞いてみても、南部弁と津軽弁とに、調子の差異がみとめられるようである。南部弁では、

○オドヨ[○]デ ヨカ[○]ッタ ナー。

男でよかったなあ。

など、「ナー」と言う傾向が耳につき、津軽弁では、

○……………[↑]ナ。

と、「ナ」をつよくおさえつけるように、しかも簡潔に、上げ調子で言う傾向が耳につく。津軽の「ナ」はきびきびしている。女性が発言してもである。気性・方言の相違を、津軽と南部とにみとめてよかろう。

いわゆる北限に、津軽方言・南部方言の東西差が見られるのにあい応じて、いわゆる南限にも、薩摩方言・大隅方言の東西差が見られるのはおもしろいことである。内部事情として、南北両限のおのおのは、ともに東西差をはらんでいる。

内部の分立・分派がこのように相似的であって、しかも、南限で、西の薩摩方言が東の大隅方言よりもより多く問題を蔵するようであるのに等しく、北限でも、西の津軽方言が、東の南部方言よりも、いっそう多く問題を蔵しているようである。そうして、はじめにも述べたように、津軽方言の方が、私どもには、いちだんと難解のように思われる。

私は、北限方言のこの東西別を重要視する。奥羽地方の、太平洋斜面方言状態と日本海斜面方言状態との差異対立の大勢に、この東西別は、おのずからよく属していると解されるからである。一・二例をあげてみれば、「こちらへ来なさい。」などと言う時の「来なさい」は、津軽で「来へ」(←「来セー」←「来さい」)であって、南部に「来へ」がなく、日本海がわには、なお南の秋田県下にも、「来へ」と同類の「来ジャー」(来さい)がある。さきの「バッテ」「バテ」も、津軽にあって秋田県北にもある。(太平洋がわにはない。)[F]子音の分布も、北限地域ではおもに津軽にみとめられて、なお、日本海がわにそれがみとめられる。「オデアッセ」(おいでなさい)のような言いかたは、南部や岩手県下において、津軽・秋田県のがわにはない。

津軽と南部との方言差は、当地方での方言分派生成過程の反映にちがいがなく、したがって、両方言の成立は、史的成果と見られる。太平洋斜面方言状態と日本海斜面方言状態との相違の生成が、国語「地方史」上の大きな成りゆきによるものであったことは、想像に難くなかろう。方言分派の系統脈絡——系脈——の相違は、国語の地方的な流れ・広まりの史実を示すものにちがいない。この国語「地方史」の見地で、津軽と南部との方言差が、重要視される。

一方から言えば、津軽方言と南部方言との対立がみとめられ、質の相違がみとめられるがゆえに、東北方言の表裏別も重視されるのである。この意味において、津軽方言の、東北方言上での地位は、重大とされる。

三 津軽方言

すでにしばしば「津軽方言」という呼びかたをしてきた。土地の人びとや多くの研究家の通念にしたがえば、このまとまりをうけとめることは容易である。地理上の津軽地域をおおうものとして、津軽方言のまとまりを、みとめることができるようである。

私のこれまでの調査経験からしても、—— もとよりいたらないものであるけれども、津軽方言のこのようなうけとめかたに、異論はない。

南部の人は、たとえば、

ツッガルのことばは、ワタジツダチデモ、わかりません。

と言う。同じ日本海がわでも、秋田県北地域になると、たとえば大館市の一主婦は、

この辺と津軽とでは、すっかりちがいます。津軽のことばは、私どもが聞いても、さっぱりわかりません。

と強調するのである。じつは、私どもには、秋田県北のことばも、総体的には、かなり津軽にかよように思われる。が、土地っ子の総体印象によれば、津軽は方言の異域なのである。

ところで、その津軽方言も、単統一色の大きなまとまりのものではない。やはり内部の地域方言差がある。たとえば青森ことばと弘前ことばとは相違がある。津軽も西海岸方面に行くと、事情が複雑になって、方言差がだんだんに見え、津軽半島を北上しても、内部差に行きあたる。今夏は、津軽半島頸部(その西の部分)にあり、津軽平野の中にある一小町、木造町で方言を調査して、この人びとが、「木造のことばは弘前ともちがう。」と言うのを聞いた。(弘前の「ネハ」という「文末のつけそえことば」は、木造では言わない。)木造町から青森市までのバス道路の途中でも、たとえば原子^{はらこ}という部落で、木造町の方言とは様子を異にする方言に接することができた。(おどろいた時、木造では「アツター。」。原子の人は「アター。」と言った。)津軽平野の中ででもこうである。津軽地方のことばを、かんたんに一くりにすることはできない。

それは当然のことであろう。人は地域ごとに地域社会をつくる。地域社会が生活圏になる。生活圏に応じて、生活集団の用語世界——方言のまとまり——が形成される。木造方言では、「あれまあ！」というような意味で「アッツァー。」と言う。これを土地っ子は、木造独特のことばと強調する。なぜ、この広い平野の中で、一地区だけが、感嘆詞のようなもの（自然詞）においてさえも、独自性を示すのか。生活圏の独自性ということをはかにしては、この事実は理解し得ないであろう。木造町とその周辺の在郷とでも、ことばのちがいを見せている。やはり生活圏のちがいである。町かたは、その生活圏にふさわしく、方言の推移が総体に早い。そこで、在かたには、木造町で言わなくなった過去のことばを保有しているのである。

こうして、地方差は、みとめられる。が、その上に、津軽方言の全体色がおおいかぶさってもいる。高い視点では、津軽方言のまとまりをみとめることができるのである。

四 津軽方言はなぜわかりにくいか

——津軽方言の特色——

さて、この津軽方言は、どのように難解であるか。私どもは、なぜこれがわかりにくいのだろう。以下には、今夏の木造方言調査の結果によって、私なりの考えを、いくらか述べてみたい。

木造町は、青森県西津軽郡に属し、五所川原市の西にある。平野の中の、孤立の町である。土地の人も、「いかにもとり残された旧式の町」と言う。藩制中期、湿地に木を埋めて村造りに努力したので、木造村と言ったとのことである。「ここを津軽弁の調査地を選んだことは、じつに正しかった。」と言ってくれる人もあった。私は、木造方言を、津軽弁——津軽方言の一純粹見本と見て、これに即して、津軽弁のむずかしさを解釈してみたい。

津軽方言のむずかしさに目をむけることは、けっきょく、津軽方言の特色を考究することになるうか。

(一) 発音の面から

一つには、発音の面から、津軽方言のむずかしさを考えてみるができる。

1. 濁る音 はねる音

○ンダ ガー。

そうか。(そうですか。)

これは、「そうか。」の「か」というのが、「ガ」と濁っている。

○ドンダペー。

どうでしょうか。

これは、「どう」のところ「ドン」となっている。濁る音やはねる音が出るのは、聞きわけのむずかしいほどのことではない。が、こんな場合にも、上の二例のような言いかたが、娘さんの電話のことばであったりすると、敬語法ぬきのことばづかいでの、濁音やはねる音が、大うつしに聞こえて、これらの言いかた全体が、妙な、わかりにくいことば、あるいは異様なことばにも聞こえる。

濁る音の、

○チサエ [saε] エッコ タデダ。

小さい家を建てた。

の「建てた」——「タデダ」のような出かたになると、これが「エッコ」の言いかたとももつれあうので、全体としては、わかりにくいことばが聞こえることになる。(上例を、分かちがきにしないで、「エッコタデダ」としてみるとよい。アクセント高音符に注意して読んでも、何のことか？と、首をかしげたくもなる。ここにたしかに、濁音のわずらいがある。)

はねる音の場合、

○ヤマンデモ アッテ、

というのでも、これを聞いた瞬間、私どもは、つい、はじめに、「止まんでも」などと、うけとりそこねをする。アクセントの指向もあってである。じつはこのことばは、「山でも有って、」なのだ。やはり、まとまった表現の中では、一つのはねる音も、私どもを困らせるのである。

○シ [i] タハンデ ヤー。

だからよ。

かような、文法的にも異様なもの一つづりの言いかたの場合だと、はねる音一つも、いよいよ何だかわからぬやっかいなものに思われてくる。(このさい、「ハ」は聞こえぬくらいになるので、「シ」の効果はいっそう大きくなるのである。) はねる音も、たしかに、聞こえのむずかしさをかもし出す一因になる。

2. 特殊発音

一口に言って、特殊発音と言える類のものがある。これらがあい寄って、津軽方言の聞こえをむずかしくしていると思われる。

「キ」は [kçi] と発音され、時に「チ [i]」に近く発音される。(「天気」「テンチ [i]」など) その「キ」の音を持った「ユキ」(雪) は、[jügçi] と発音される。——もっとも、[g] は、つよくない。

「何なにと言うのは」などと言う時、「ズーノワ」(言うのは) と言うことがある。「言う」が「ズー」に聞こえたのでは、何のこともか、すぐにはわかりかねるわけである。

[F] 子音がかなりよく出る。たとえば、「奥の歯」を「オクノファ [Fä]」と言い、「百」を「フィェク」と言う。「フィェク [Fiakü] ショーヤ」は「百姓屋」である。「ハヤフト」は「早い人」である。こうして、思いのほかに[F]音が出てくると、聞き手はとまどい、ために、聞きとりがむずかしくなる。

「在郷」は「ジャイ [i] ゴ」 と発音される。ここに [za]・[za] の別がある。「ジェンゴ」、これはおかねのことである。(ぜにこ)

○サマンジャマン ナッテ

これは「さまざまになって」である。発音だけ聞くと、やはり迷おう。「ワンジャネ [e]」と言われると、何のこともか、ちょっととまどうのではないか。「わざと」の意の副詞である。

共通語の「ウ」が「ル」と発音される場合がある。こういうのが、特殊発音中の特殊発音であって、聞き手は、まどわされるばかりである。「フラル [ü]」、これは「ひろう」である。「フラル [ü]」、何のこともか。これも「ひろう」で

ある。

○ア^下 カル モ^下 ナ^下 [naε] カ。

このあと、買うものはないか。

ここの「カル」は「買う」である。「ウ [ü] タル [ü]」は「歌う」であり、「ワラル [ü]」は「笑う」である。

○モ^下 シ [i] マル [ü] ベ^下。

これは「もうしましょ。」である。「食う」は「クル」にはならず、「ク [ü] —」である。

つぎに、「オーフテ」(多くて)の類がある。共通語の [ku] が [Fu] と発音されている。この傾向が、つぎのように見られる。

○コレワ ドフ^下トクダ ナ^下。

これは独特だなあ。

○オモテ [e] フテ マイ [i] ネ。

重たくてだめだ。〈小学一年生の男子、学校から帰る。せなかの荷物の重いことを言う。〉

○コンダ コネフテモ エ [e] ガ^上ベ^上。

こんどは来なくてもいいでしょう？

○オメ^下 クヅシ [i] タ^下 トロケネ^下フテモ イ [i] ー^下ダ ガ^下。

あんたは、くつしたをとりかえなくてもいいの？

○オメ^下ダノ エ [e] デ [e]、シマ^下エ^下ッ^上コ エ [e] ー^下フテラ ナ^下。

おまえさんたちの家で、「しまいっこ」(田畑のしごとのしまい)、よくいったな。

実例がこのようにおしよせてくると、私どもは、「ク」>「フ」の転訛になやまされることになる。それも、「Fu」が単純に出てくるのならよいが、文法と組み合せて、「エ [e] ーフテラ」のような形にもなると、「ク」の「フ」が出てくると、聞き手は、まどわされてしまう。

/s/ > /h/ は単純な変化である。たとえば、「かぶせて」が「カブヘテ」となっている、判断には困らない。ところでこの転訛も、また、津軽方言の独特の

文法事情の中で出てくると、その文法事情と/s/>/h/とが、あいよって、私どもを困らせる。

○コレ [e] ケ [e] へ [e]。

これ下さい。

この「ケ [e] へ [e]」が「くれなさい」なのである。「なさい」の「セ [s]」と訛ったものが「へ [h]」となっているのである。「ゴメン ケへ。」は「ごめん下さい。」である。

○ゴヘン ナー。

とは、「ごさいませんなあ。」である。

3. アクセント

特殊発音そのものからも、それらと特殊でないものとのつながりかたそのことから、聞きとりのむずかしさはおこってくる。そのような発音の、アクセントそのものによってもまた、私どもは、大いにまどわされる。たとえば、

○メーデ ヘン ガ。

と言い、

○メーデ ヘン ガ。

と言う。前者は「見えていませんか。」の意であり、後者は「姪ではありませんか。」の意である。

(二) 語詞の面から

二つには、語詞の面でも、津軽方言のむずかしさを、いかにもと理解することができる。

津軽弁に、——ここ木造方言でであるが、さまざまの難語・奇語がある。中には古態の、山緒正しい語詞もある。こんなのが、会話の中に、それこれと出てくるとなれば、聞く方は、文意の把握にとまどわざるを得ない。

以下、いくらかの実例をかかげてみよう。

1. 副詞例

副詞語彙ひとつを見ても、津軽弁の異色がよくわかる。たとえばこんなのがある。

イ [e] ャドイ [e] ャ^下

これは「そろそろと」の意になるものである。

ジャッ^上グト

これは「はりきって」である。

ペロー^上ット

これは「偶然」の意の副詞である。

ジョー^上デ [e] ー

これは「全然」の意の副詞である。

ト^上ドゴマ^上ンドゴ

これは「ところどころ」というのである。

木造方言調査のある夜、一民家で、老嫗が、「まあ、あんたはゆっくりと。」と、私にあいさつしてくれて、立って行った。その「ゆっくりと」は「ユッタ^上ド」だったのである。ここで私は、古風な副詞が当方言に聞かれる可能性を思った。そのごとらえたものが、

ム^上タト、ム^上ッタ^上ド

何回も、何回も何回も

マ^上デニ [i]、マ^上デーニ [i]

ていねいに

などである。

イ [i] チ [i] ニ [i] チ [i] フ^上ダ^上メニ [i]

一日おきに<一日「日だめ」に>

というもある。

2. 形容語例

「ノコロイ [i]」(残念だ) というのがある。「残り多い」からきたものであろう。

○ノコロイ [i] ノ。

残念だね。

のように言う。

○ナン^ナボ ウ^ウダ^ダデ バ ナー。

とても困ったことったら。

ここに「うたてい」という、古語の形容詞がある。

ア^アヂ [i] マシ [i] ー

は、「味ましい」と見てよいものか。この形容詞は、津軽弁の一つの目じるしのようなものである。(これと、「だめた。」などという時の「マイ [i] ネ。」と、二つは、津軽弁のマークのようなものである。)津軽で、「うたてい」のような古語をよく遺存せしめていれば、「味ましい」などの新製作もよくしている。新・旧、入りまじって、津軽弁形容語彙は特異なものになっている。

さて、上の「ア^アヂ [i] マシ [i] ー」でも、その意味作用が一とおりではないから、この語のつかわれているのを聞くにつけても、人はしばしばうけとりかたに迷う。

○ク^クサ ト^トッタ^タケ^ケー、ナン^ナボ ア^アヂ [i] マシ [i] ク ナ^ナッ^ッター。

草をとったから、庭(「ツッ^ッボ」と言う)がとてもきれいに(気もちよく)なった。

この例では、「きれいな」ことに、「味ましい」と言っている。きれいなので、気もちがよいため、こう言うようである。総体に、「心もちがよい」ことを「ア^アヂ [i] マシ [i] ー」と言う。家庭の裕福な、平和なことなどにも言うことがある。

つぎに、こういうのがある。

イ^イッ^ッパ^パダ^ダダ ゴ^ゴド

変なこと

「イ^イッ^ッパ^パダ^ダダ」は「変な」である。

3. 動詞例

ウル^ウダ^ダグ

は「急ぐ」である。「ウル^ウダイ [i] デ イ [i] ゲ[↑]へ。」(急いで行きなさい。)などと言う。

ハ^ハバ^バゲ^ゲル

は、餅などの、のどにつかえて、はいりも出もしないこと。

キ [kçi] マゲル

キ [kçi] マヤゲル

は「怒る」である。

ドッテンシ [i] タ

は「びっくりした」である。

ヤーチャゲデマツタ

「ひどく困ってしまった」というものもある。

トロケ [e] タリ [i] カタツゲタリ [i]

ここに重ねかけた言いかたがあるが、二つの言いかたは「フツコト」(一つこと)——同じこと——で、片づけることだ、という。

4. 名詞例

名詞例ともなると、引くべき例は多い。そのはずであろう。

無数の奇語・難語の類が、そうしたものの多出・頻出が、話しの聞こえをむずかしくする。

変わった名詞のいくらかを出してみよう。

ケリ [i]

これはじつに靴のことである。そう言われてみればなるほど、という語ではなからうか。鼻緒を足ゆびではさむことから、蹴ってあるくことへ、時代とはきものとは新化した。なるほど、はじめて靴をはいた時は、「ケリ」(蹴リ)を大いに実感したことだろう。「ケリ [i] ハイ [i] テイ [i] グ」は「靴をはいて行く」である。

ナカケリ [i]

は「長ぐつ」ということになる。

アグ下

は「かかと」のことである。

ゴンジャラシ [i] シ [i] タ

は「はじさらし」したということ。

ジャンボ カッテ

は「髪」を刈ってということであるという。

カラッポネ [e] ヤミ [i]

は「なまけもの」のことであるという。

○<あの人> ナンボ カラッポネ [e] ヤミ [i] ダ オン[↑]ノー。

とてもなまけものだものね。

などと言う。「カラッポネ [e] ヤミ [i]」という言いかたは、東北的な色彩の濃い言いかた、東北気分のよく出た言いかたではないか。

東北では、何にでも「コ」をよくつけることが、すでに広く知られている。津軽もむろん、その東北調のうちである。たとえば「電話」も「デンワコ」と言う。私ども、よそ者から言うと、思わぬ所にも「コ」がつくので、「コ」のついた名詞に、時どきとまどう。このために、話しの聞きとりが変になることは、すくなくない。「デンワコ」に関する一例をとりあげてみる。私が、木造町のあるそば屋さんで、調査させてもらっていると、そこの主婦が、電話でこう言った。

○モスコスナッテカラ、デンワコス [ü] ッジャンノー。

私はこのことばに耳を傾けていて、「もうすこししてから、電話をよこすジャンノー。」というように聞きとった。——こちらのさかしらである。「もうすこしして」を、「～ ナッテカラ」と言うことのおもしろさは理解できて、つぎに、その場の話しあいの様子から、「デンワコス [ü]」を「電話をよこす」とどってしまったのである。「コス [ü]」の「コ」の所に、一段と高いアクセント音があることも、私に、早くその判断をさせることになった。しかしである。やがて気づいてみれば、「デンワコス [ü]」は「電話コをする」以外の何ものでもなかった。「ス [ü]」のつぎの促音、つまりは「ス [ü] ッ」という発音も、注意すべきだったのである。

思わぬことばにまどわされる。かってがちがう方言となると、とかく、つまらぬことにも迷わされる。難解と言えるような方言の場合は、語詞的にも、とかく、それによってこちらが迷わされる語詞が多い。津軽方言も、たとえば共

通語にない語詞を、多く持っている。これは、外部の者には、どうにもとりあつかいにくい、困ったことである。

(三) 文法面から

三つには、文法面から、津軽方言のむずかしさを、いろいろに考えてみる事ができる。以下にかかげる範囲の事実をおさえてみても、私どもは、津軽方言のわかりにくさ・うけとりにくさを、じゅうぶんに知ることができる。(一以下の諸項のような文法にとりまかれては、私ども、とっさには、立ち往生するほかはない。)

1. 短縮文法

まず、こういうものがある。「短縮文法」という言いかたをしてみる。) 津軽弁では、とかく、言いかたが、短縮されているのである。こんなのに出あうと、何のことかわかりにくくて、しばしば困る。

○ダ ナンテモ イガナエ。

だれが何と言っても行かない。

「ダ ナンテモ」とは、ずいぶん短縮した言いかたではないか。

○ラ ヤル。

が「私がやろう。」である。

○ナ ヤル ガー。

は「君がやるか?」。

○アカンボ マイ [i] ダ。

あかんぼうがうまれた。

も、一短縮例とされよう。

短縮文法のことは、土地人も気づいていて、

短くしゃべる。略して、字の数がなんぼもない。

と言う。字の数のない、切りつめた言いかたは、短縮文法であって、これはまた、音省略でもある。文法問題が、発音問題にもなる。どちらから見るにせよ、要するに、短縮・縮約が目だつ。

(南部地方にも、短縮はある。しかし、津軽地方の短縮状況は、いっそう顕

著である。ちなみに、南部方言下の三戸郡^{しまもり}島守方言では、長音の特色がみとめられた。「よい」の「ヨー」、「小さい」の「チャッコー」、「おもしろい」の「オモシ [i] ロー」、「こっちへ来い。」の「コッチャ コー。」、「大豆」の「ダーズ [ü]」、「咲いた」の「サーダ」、「まけないように」の「マケナーヨーニ」などがある。老女に比較的好く、こんなのがみとめられるか。人は、「みんな、イは伸ばすのが島守ことばの特色」と言っていた。このような長音現象は、津軽では見られないようである。津軽はむしろ短呼の国である。）

津軽の短縮文法の、端的な例に、

○へ^バ、

がある。これが、「そうすれば」にあたる。ずいぶん縮めたものではある。

○ソ^ンテ^ネバ

は、「そうでなければ」である。

○ヒ^ャク サン^{ジュ}ーエン^テへ^バ、

百三十円と言え、

では、「と言え」の「テへバ」が見られる。

○コレ タ^ベヘ^ン カ。

これをたべませんか。

この「ヘン カ」のところにも、短縮のあることが明らかであろう。

○ケ [e] シ [i] テ ガー。

は何か。「シ [i]」は敬意をそえる。——「ます」助動詞などの一部分か。「ケ [e]」が「くれ」である。全体は、「やりませんか。」「やりなさい。」の意になる。やはりこの例も、一つの短縮文法事実を示す。

○ハ^ッテ マ^ッテ ヘ^ッ。

“はいって待って下さい。”

早口にこれを言われたのでは、何のことか、わからないだろう。

○ヨ^ミ [i] ニ [i] グ^ェバ コマル^{ハン}デ。

読みにくければ困るから。

の「グェバ」もわかりにくい。——「～くければ」である。

このように、縮約の形・音、あるいは短縮文法が、つきつぎにいろいろとせまってきたのでは、こちらはとまどってしまう。けっきょく、津軽弁はわかりにくいということになる。

2. 文末法

もの言いのことばじりに、とかく、いろいろの「つけそえことば」がくる。このために、また、そのもの言いが、何のことか、わかりにくいものにもなる。文末のつけそえことばは、文表現の、訴えかけのはたらきを、特につかさどるもので、一文の重要因子である。これを私は文末詞と呼ぶ。話しあいの時には、文表現に応じて、それこれ、とりどりの文末詞が、さまざまに出現するので、聞き手は、その変相にもとじこめられて、文意の一々の把握が、困難になる。

○イ [i] マ シ [i] ー。

○イ [i] マ ダンザイ [i] シ [i] ー。

などと言う。——「今 シ [i] ー。」と、「シ [i] ー」がつく。「今、現在 シ [i] ー。」と、「シ [i] ー」がつく。「シ [i] ー」は何だということになる。——わからないものがついているので、たとえば「今 シ [i] ー。」の全体が、何のことかわからなくなる。

「シ [i] ー」のつかわれかたはいちじるしい。

○タンダ シ [i] ー。

ただね。

○ヨツカダト シ [i] ー。

四日だとね。

○オトトイノ バンダ シ [i] ー。

おとといの晩だね。

○……………ネ シ [i] ー。

……………ねえ。

○クシ [i] ナガ シ [i] ー。

たべて下さいませんか。

などと、呼びかけ・訴えかけのため、「シ [i] ー」をしきりにつかっている。「シ [i] ー」の元は「もし」か。「もし」のようなものなので、「シ [i] ー」はよく、呼びかけの用にあてられるのであろう。

つぎに、「バ」という文末詞をつける言いかたがある。

○ナン^バ ^{メー} ^バ。……なん日でもできますか。
とてもうまいよ。

○タイ [i] シ [i] タ ^{ゴド} ^{ネー} ^デ ^バ。……たいしたことはないよ。

○ド^ゴ ^イ [i] ^デ ^バ。……どこが痛いか。

○ド^ゴ ^イ [i] ^グ ^ネ ^バ。……どこがよくないか。

○ナン^ニ [i] ^ヂ [i] ^デ ^{デキ} [kçi] シ [i] ^{バー}。……なん日でもできますかね。

老若男女が、「バ」をよくつかう。同等以下によくつかう。(かといって、目上にも、言わなくはない。)土地人の一人二人は、「ひとりごとの時、バーを言う。」とか、「<バーをつかって>自分の気もちを言う。」とか、教示してくれた。なるほど、上のはじめの二例などは、まさにその説明どおりのものである。(「バ」の起原としては、「私」系の「ワイ」>「ワ」が考えられようか。その「ワ」の転訛で「バ」ができたかと思う。)が、上記の下三例は、問いになっている。(—用法の拡張だと思う。)こうなって、その話しのことばを聞く者は、「バ」の意味をとらえるのに難儀するのである。

○^ン ^デ ^{バー}。

というようなのが出てくると、こちらは、何のことかと思う。たずねてみると「そうです。」という意味だとのこと。したしい仲で言うという。

つぎに、「オン」という文末詞をつける言いかたがある。たとえば、

○^ン ^ダ オン ^ノ ^ー。

○^ン ^ダ オン ^ノ ^ッ。

だもんねえ。〈大いに肯定する。〉

のような言いかたをする。「シダ」は「そうだ」である。はじめの例では、さいごの「ノー」を除いて考えると、「オン」もつけそえことばということがわかる。(——「オン」は「もの」からきたものであろう。)(さいごの「ノー」が、一方の例では「ノァ」となっている。このような「ァ」については、のちに述べる。)

○シダ オン シ [i] [↑]ァー。

これも「だもんねえ。」と、大いに肯定する言いかただが、おわりは「シ [i] ァー」になっている。「シ [i]」はさきに出た「シ [i]」であり、そこにまた「ァ」がそわっている。

○ソシダ オン ネシ [i] ァー。

そうですねえ。

これは、「オン」「ネ」「シ [i] ァー」と、いろいろの文末詞がうちかさねられたものである。そうわかれば、むずかしくはないようなものの、いきなり、上のように一つづきのことばが聞こえてくると、いささか面くらう。

文末詞「オン」は、他の音・ことばと、もつれあった形でも、出てくる。たとえば、ペーペーことばの「ペ」ともつれあって、「ペオン」「ピオン」と聞こえてくる。

○モー チ [i] ギ [gçi] シ [i] マル [ū] ペ [e] オン。

もうじきしまう(おわる)だろうよ。

○タブン イ [i] グニ [i] イ [i] ガペオン。

たぶん行くことができるだろうよ。

では、「ペオン」が聞かれる。土地の一有識者は、つぎのような説明をしてくれた。

○オマエ [mas] イ [i] グペー。

[たしかめ]

○ヤマサ (山に) イ [i] グペア。

[さそい]

○ヤマサ イ [i] $\overline{\text{グベオン}}$ 。

[たぶんいいだろう]

「ベオン」は、たぶんよかろうと、自分の思いを言うのである。

○ $\overline{\text{ダビオン}}$ 。

ここでは、「ビオン」が見られる。

○ソシ [i] $\overline{\text{タビオン}}$ 。

たしかにそうであったろう。

これでは、「ベ+オン」が「ビオン」となっている。

○オーキ [kçi] $\overline{\text{ケッコソシ}}$ [i] キ [kçi] $\overline{\text{アッタズオン}}$ 。

大きい結婚式であったという話した。

これでは、「ズオン」が聞こえてくる。このようになって、「オン」文末詞のうけとりかたも、いよいよむずかしくなってくる。

つぎには、「ケァ」という文末詞——と見られるもの——をつける言いかたをあげる。

○マイ [i] $\overline{\text{ネ}}$ ケァ。

という言いかたがあり、これは「だめだよ。」ということであるという。「ケァ」が「よ」にあたる。

○スッタ $\overline{\text{ゴド}}$ $\overline{\text{ヘバ}}$ マイ [i] $\overline{\text{ネ}}$ ケァ。

そんなことをすればだめだよ。

などと言う。いきなりこの文を聞かされれば、「ケァ」は何だということになる。

○ $\overline{\text{ネ}}$ [ε] $\overline{\text{ソソダ}}$ $\overrightarrow{\text{ケァ}}$ 。

これがまた、「ないんだよ。」であった。

「ケァ」の「ァ」は、つけそえ音で、さきの「ノァ」の「ァ」などと同じものであろうか。「ァ」を除くと「ケ」が残る。「ソソダケァ。」(“そうです。” “なるほどそうだ。”) などというのを見ていると、この「ケ」は、もともと、「有ったッケ。」などの「ケ」と同似のものかもしれないと思う。

○ソソダッケァ $\overline{\text{ナー}}$ 。

“なるほどそうだなあ。”

などとも言っている。——「ダッケ」となっている。この「ソ^ッダ^ッケ^ッナー (ナー)。」も「ソ^ッダ^ッイ^ッナー。」も同じで、「なるほどそうだ。」の意だなどと言っている。こうなると、「ケ」は、つけそえことば (文末詞) 的なものにもなっていくのであろうか。

つぎに、前まえから出てきた、文末の「ッ」音を見る。前出例 (p.56)、

○ソ^ッダ^ッ オン シ [i] [↑]ナー。

のようなのを見ても、人は、さいごの「ッ」は何だろうと思うだろう。妙なものがついていると思う。ここで、意味はどうなんだろうと、だれしも疑問をおこす。こうして、文末の「ッ」音も、津軽弁のうへの、一つのわずらわしいものになる。(じつは、津軽弁だけにこれが出るというのではないようであるけれども。) 津軽弁では、

○モ^ッシ [i] モ^ッシ [i] ナ^ッ。

もしもし。〈電話〉

○ホ^ッレー。

ほれ!

○ユ^ッキ [i] ツモ^ッッ^ッナー。〈小学六年男子の発言〉

雪が積もってね。

○マイ [i] ネ^ッ。〈つよく叱る時、「マイ [i] = っ。」〉

だめだよ。

などと、「ッ」がひじょうによく出る。文末「ッ」音のおこなわれかたは、まったく、広くて多くてさかんである。(この文末「ッ」音は、津軽弁の一大特色をなしている。)

「ッ」の小文字符号は、その音が前音節にからまって出てくることを意味する。その「ッ」が「ナー」と長呼されることも多い。「ッ」が、

○ソ^ッデ^ッスベ^ッナー。

そうでしょうよ。

のように、遊離的に、大きく発音されることもある。(——「ア」と大文字で

表記すべき場合もおこっている。)

以上のような「ァ」「ア」音は、何と解したらよいものか。私は、文末訴え音と見るべきものと思う。つまりこれも、一種の文末詞なのである。「～ペアー。」となった「アー」は、もはや形態素あつかいをすることができる。しかし、「～ペァー。」の「ァ」のようなのは、形態素あつかいにはしかねる。まず、この方を本位に見て、今は、文末訴え音という、もののみとめかたをする。純音声上の文末詞である。

なぜこのようなものがおこったか。文表現の訴えの効果をよくしようとして、こういうものを工作したのであろう。「じつは シ [i] ー。」と人に話しかけても、その「もし!」という訴えの「シ [i] ー」の、狭母音の、相手への訴えの効果は、まことに小さい。こういうのは、効果を増大・増幅する必要がある。そこに、人間自然の対話心理が、おのずからはたらいたであらう。「シ [i] ー」に「ァ」音が増加されることになった。——と、私は見る。(「て」どめのことばづかいかにも、「ネ」どめのことばづかいかにも、何どめのことばづかいかにも、「ァ」の特別音がつけそえられたのである。)ともかく結果として、ここに聞こえの効果の増大増幅・明瞭化・強化があることはあらそえない。「ァ」は、文末にそわって、その文末の聞こえ、訴えの効果を顕著にすることに役だっているのである。その自然の成りゆきで行けば、「シ [i] ァ」は、「サ」に近く聞こえるように発音されることにもなるのが当然であらう。「～ペァー。」が「ペアー」となっているのも当然であらう。(「ペァー」のような「ァ」の長呼も当然である。)

つけそえ音として、ほかならぬ/a/音が選ばれたことも、これまたもっともと思われる。文末訴え音なら、聞こえの大きいものがよからう。しぜんに/a/がとられたものと思われる。

こういう自然心理的事実は、まことに、どの方言におこってもよいはずである。まさにそのとおりで、仙台方言、あるいは宮城県地方のことばにも、

○ナニッ シャー。

何ですか。

などの言いかたがいちじるしい。「シャー」は「シァ」(「し^{めし}」+ァ)からきたものであろう。ただし、こちらでは、もっぱら「シャー」がおこなわれている。津軽方言の場合のような、訴え音/a/利用の広さはない。そういう点で、津軽方言の場合は、東北方言中でも、特別視される。

「ァ」音添加の文末「訴え法」は、なお他地方にもあることを、付言しておきたい。

津軽方言には、「ァ」音利用の文末法をはじめとして、いろいろの文末法がある。上来のものだけを通観してみても、この世界の広さと複雑さがわかる。さて、わかりにくい「つけそえことば」の、複雑にとり用いられる方言表現は、すぐには理解しにくいものにちがいない。

3. 敬語法

私どもは、津軽方言の文末詞・文末法に圧倒され、また、敬語法に圧倒される。

敬意表現法あるいは待遇法の世界は、これまた広い。いろいろのことばづかいが、——たとえば文末詞法でも——、敬意の表現法として役だてられている。ここでは、その中の一部のこと、いわゆる敬語法をとりあげる。今は、その敬語法一斑を見ることにしよう。——やはりこれが、難解なのである。

一つに、

○コレ[↑]バ ケへ。〈中学生のことば〉

これを下さい。

のような言いかたがある。「ケへ」と言われると、聞いた感じでは、そんなによいことはないことばかと思われる。しかし、事實はちがう。「ケへ」は「くれなさい」である。

○コレ [e] ケ [e] へ [e] ン ガー。

は「これを下さいませんか。」である。土地人も、「ケへ」がいちばんウエダ(上な)ヨーデスネ[↑]と言う。人びとは、

○オメモ クシ [i] チ ガー。

あんたもたべませんか。

よりも、

○………… タベヘン カ。

の方がよい言いかたとも言っている。いかにも、「へ」は、「食う」にはではなくて、「たべる」というのにつづいている。(「クシ [i] テ ガー」の方は「食う」の言いかたになっている。)

○コツツァ キ [kɕi] ヘ デァ。

こちらへ来なさいな。

のように、「来へ」の言いかたを、さいごに「デァ」で包むと、文表現全体は、いっそうやわらかなものになるとされている。

「………… クシ [i] テ ガー。」のような言いかたも、考えてみれば、妙な言いかたである。だいいち、聞いた時、意味がわかりにくい。ましてや、敬語法の言いかたであることなど、気づきにくい。他の類例を出そう。

○ヤリ [i] シ [i] テ ガー。

これは、「やりませんか。“やりなさい。”」ということになる。

4. 用法特異

ものは共通語のと似たものでありながら、用法は、共通語のとはちがっているものがある。そのような、用法特異のものは、聞いて、わかりにくい。

○ナンボ 味ましい。

などの「ナンボ」が、「とても」の意の副詞になっている。(すでにいくらかの例が出た。)やはりいちおうは、これにとまどうであろう。

○キョーダバ マネ。

きょうはだめだ。

この「～ダバ」にしても、「だらば」であることを思えば、共通語流に言うと、「きょうならば」ととってよいが、じっさいは、「きょうは」というくらいにとってもよさそうなのである。

○「バー」ダバ ツカネー。

<格助詞の>「バ」はつかわない。

にしても、「～ダバ」は、文字どおりの「～だらば」ことばとしてではなくて、

これでは、「べ」の用法は、前例のとはちがう。——「でしょう」などとは言い換えられないものである。父さんは北海道に行っている。母さんはすでに死んでいる。ともに、いないことがはっきりとわかっている。なのに「べ」と言っている。用法は微妙である。

○オヤヅァ カヘグ^o = [i] イ [i] テ イ [i] ネベシ [i]、ハハオヤシ [i] シダベシ [i]。

おやじはかせぎに行つて、いないし、母おやは死んだし。

いないことがはっきりとわかっているのに、「イ [i] ネベシ [i]」と言う。

方言では、じつは、どのことばづかいがどんなに微妙であるかもしれない。かんたんな推断はゆるされないことである。津軽の「べ」にしても、こういふぐあいだと、「べ」ことばが出てきたからといって、かんたんにはうけとれないのである。

用法微妙の現象があればあるほど、私どもは、方言理解に、ほねをおらなくてはならないことになる。

6. 特殊語法

津軽方言のむずかしさ・わかりにくさについて、文法面から考えることは、すこぶる多い。が、もはやこの方面の叙述を切りあげることにし、さいごに、いくらかの特殊語法——と、かりに言つてみたいもの——を列挙してみる。この種のもの、一般的に言つて、理解困難な語法が多ければ多いほど、私どもは、その方言の表現の聞きとりに苦しむわけである。

○ヨンヨンヨン。ナンモ スッタ ゴド シ [i] ナクテモ ヨン。

これは、「そういう必要はありません。何も、そんなこと、しなくてもけっこうです。」ということであるという。

○ナンモ サネー。

何もしない。

○デルモ サナエー、オンヂ [i] ルモ サナエー。

出もしない、落ちもしない。

このような、「サネー」「サナエー」の言いかたも、特殊語法の一つと見られる。

○マイ [i] [↑]ヘン。

だめですよ。

この言いかたも、「マイ [i] ネ。」(だめだ。)と見あわせる時、まさに特殊と見られる。

○ソッダデバ シ [i] ッツァー。

これを木造町のものがよそで言っ、よく笑われるという。——木造ことばの一徴表らしい。これが、「それ その とお り だ べ。 その とお り で し ょ う ?」の意になるという。特殊語法であることが、わかりやすかろう。

○テンボデ ネー ガー。

これは、「あまりとつびなことをした時に、それにたまげて言うことば」であるという。上の言いかたとつれをなすものに、

○バカンデ (ばかで) ネー ガー。

がある。

○テンボダ コト ヤル。

“とてつもないことをやる。”

「テンボな」を「テンボダ」とする。これも一特殊語法にちがいない。(津軽だけにおこなわれるものではないけれども。)

○ソーッデ ネー ン タ。

は、「そうでないようだ。」ということであるという。

○オンボコ モツター。

は「あかんぼうをうんだ。」である。

○タイ [i] シ [i] タ マメシ [i] シ [i] テラ。

“たいへん丈夫でいる、まめにしている、元気だ。”

ここに「マメシ [i]」の言いかたが注意される。

○イ [i] ッ タ キ ャ ー、

行ったら、

○ヤメダ キ ャ ー、

やめたら、

○キ [kçi] ーダキヤー、

聞いたら、

このような「ギヤー」の言いかたもある。

特殊語法と言いたいようなものが、会話中、とかく耳によくつく。(わからな
いから、そうなのでもあろう。)「エダハンデ」(あるから)などの「ハンデ」
(もともと「ほどに」)のような言いかたも、会話中、たびたび耳朵を打つよう
に思える。——「ハンデ」の出ってくる頻度は高いな、などと感じる。こうい
たふんいきの中では、方言そのものは、まったくむずかしいものに思えてく
る。

(四) 方言表現の全一的な聞こえ

以上、津軽方言のむずかしさ・わかりにくさを解明しようとして、三方面か
らの分析を試みた。分析して観察してみれば、以上のようなことが言える。

しかし、現実には、言うまでもなく、方言の表現は、一々、全一的なもの
として聞こえてくる。各現象面別に見られたようなことは、あいともなって、一
元的に聞こえてくる。

しかもその一元性を有力にささえるものは、文アクセントである。私ども
は、上述の、むずかしさを感じしめる条項、すなわち方言特色について、なお、
最後の文アクセント特色をうけとらざるを得ない。

その文アクセントの「特質傾向」(社会習慣)と言えるものは、個々の文表
現の分析単位ごとにとらえられる「あと上がり」傾向である。たとえば、

○ナンモ スッタ ゴド シ [i] ナクテモ ヨン。 <p.63>

○イ [i] ー テンキ [kçi] ン ナッタ ネシ [i] ー。 <p.38>

の二例を見ていただきたい。表現の分析単位ごとに「あと上がり」の文アクセ
ント傾向がみとめられる。この「あと上がり」が、特質的な傾向をなしている
と見られるのである。

私どもは、部外者として、上のような津軽方言にたちむかう時、また、その
文アクセント傾向の拍子・波動に乗りかねて、しばしば文意をとりそこねる。

文アクセントとともに考慮すべきものに、「文」発言の速度がある。(表現

のテンポ)私は、津軽方言の発言について、おもしろい等時的拍節的リズムを感じている。

○ハッテ マッテ ヘァ。 <p.53>

などの例で、すぐに察知していただければよい。じつにきれいな等時的拍節的リズムをうけとることができるのである。私のとった録音を聞いた一知人は、すぐに、「フランス語の発音を聞くようだ。」と言った。フランス語のことは、私にはほとんどわからない。しかし、この感想には共鳴をおぼえたのである。

さてそのきわめて等時的な拍節リズムに乗って、難「語句」・難「発音」・難「語法」が、総合的に出現してくる。

五 「音声言語としての方言」の研究

津軽方言のような、聞くだに難解と感ずる方言に接してみても、今さらのように、方言研究が「音声言語としての方言」の研究でなくてはならないことを思う。音声言語としての方言を把握する態度が、徹底的に純化されていなくては、方言究明のしごとは一歩も進まない。

かんたんな例によって、ここの主張を確実にしよう。文末訴え音とした「ァ」にしても、これは、方言表現を、もっとも忠実に、音声言語の見地で追求するのではなかったら、捕捉解明することができない。「文末訴え音」の考えは、方言を純粹音声言語として追求すべきことを主張する態度につながるものであった。

従来は、方言の研究ではあっても、それがやはり、書きことば研究に引かれがちになった。話しことばを見ると言っても、それはしばしば、書きことばを裏に見た、話しことばの見かたになったのである。方言文法の研究にしても、その多くは、音声言語としての見かたの徹底しないものであった。たとえば「ソーカイ。」「ゾーカン。」などの言いかたがあると、研究者は、「カ」と「イ」「ン」とを分別してとりあげ、そのおのおのを別個にあつかって、それぞれを、終助詞などと呼んだのである。私は、「カイ」や「カン」は、これらのままで、

一体としてうけとったのがよいと考えている。音声言語上の現象として見て、「カイ」や「カン」は、一体の要素と見るのである。（「イ」や「ン」は、「カ」発音の自然音尾と見る。）

「ア^ー シ [i] ャー。」（あのねえ。）などの「ャ」のようなものをも——ものをこそ——とらえて活写しなくては、方言研究ではない。「ャ」音添加の習慣のつよさを見るがよい。方言上の習慣として、ぜひともこれはとらえなくてはならないのである。

方言の世界は、どのような文字言語にも拘束されない、こだわりなしの、純粋口頭語、純粋音声言語の世界である。文字化を想定して方言研究にあたりしただけではいけない。

津軽方言であろうと、どの方言であろうと、方言研究には、すべて、音声言語研究としての純粋な出発がある。

未開民族などの未知の言語、その、文字を持たない言語の研究にあたっては、研究にしたがうものは、だれしも、その言語の現象——音声化の現象——の純粋享受につとめて、もっぱら音声転写的にことばを受容するであろう。——わかるわからないにかかわりなくである。この時は、しごとが、まったく、純粋音声言語の研究になっている。方言という、まとまりの存在も、たとえば共通語の見地からするならば、まさに未知の言語である。しかもそれは、「書くことを予定しないことば」の世界である。それゆえ、私どもが、もっとも忠実に方言研究にむかうかぎりには、まさに、文字のない未開民族語の初発研究にしたがうのと同様の態度で、ことにあたる必要があると思う。方言研究の場合にも、まったく、音声転写の記録、純粋音声言語相の徹底的なとりあげについて、逐次、法則的事実を求めていくべきである。

津軽方言のような対象に直面しては、ことに、形態素的整理に気をうばわれることなく、つとめて音声相そのものに追随していくようにしたい。津軽方言は、日本語方言上、重要視すべき一局限状態であると言った。その局限状態の研究のためには、津軽方言を、純粋音声言語の世界として見つめることが、根本的に重要である。

さて、未開民族語などの、研究者にとってはじめての言語の場合であれば、さいしょから極端な微視作業にしたがうよりも、音声相のほどほどのまとまりを、それとしてみずけとることがたいせつであろう。資料として、総合体を取りあげなければ、生きのよいしごとは、しはたすことができない。これと同様に、方言研究でも、対象把握にあたっては、まず、音声相のそこそこの完結体、総合体をとらえることが肝要である。未開民族語などのことに徴して、方言研究の場合にも、総合体を取りあげなくてはならないことを知るべきである。

音声言語としての方言を見つめ、純粹音声言語の観点のもとで方言をとらえるということは、けっきょく、方言の現象を、一つ一つの総合体としてとりあげるということになる。一々の総合体は、「文表現」とも見ることができる。私は従来、方言研究は文表現本位観を骨子とすべきことを述べた。このことは、今、改めて言えば、音声言語の純粹なまとまりを追求すべしということになる。文表現本位観の主張と、方言を純粹音声言語として研究すべきことを言う主張とは、一致する。

六 方言研究の将来

将来の方言研究のためには、方言を純粹の音声言語としてとらえる研究法が、確立されなくてはならないであろう。

方言を文表現本位にとらえていくという、私のこれまでの説明は、音声言語としての方言を、音声言語としてとらえていくという思想を、表現し得てはいない。「文表現本位」とは、総合的把握をのみ言うのに急なことばであった。

今や、方言を徹底的に音声言語として見ることにすれば、そこで、おのずから、方言事実の総合的把握は実現しうることになる。——文表現本位観は、そこにしげんに生かされる。私にとっては、今、文表現本位観からの脱化が、新しい研究法の確立のため、有意義である。

「純粹音声言語としての方言」の分析作業を、どのように秩序づけるか。す

でに一つ一つの総合体をとらえたうえは、それらをどのように分析してもよい。とはいうものの、方言の地域性をつねに顧慮した、有効な分析こそが必要である。

方言は、たがいに他とはりあって存在する、地域特性を持った言語団体である。こういう方言を、現実の地域々々の方言として認知し、把握し、また比較もするのが方言研究である。地域性はあくまで尊重すべく、その結果を、まさに「方言」論にのぼすべきである。もしも、解明が分析過度にわたり、地域性をこえて分析が機械的に実施されて、その結果、船舶をその構成分子、鉄片で説明するのにも似た説明がなされるようになれば、これはもはや方言研究ではない。

研究法の将来とともに、研究開拓の将来のことが考えられる。

方言に対する、音声言語としての、徹底的な見かた、——上來述べたような見かたを問題にする段になれば、津軽方言の研究も、いよいよこれからと言わなくてはならないであろう。東北方言の中の津軽方言について、討究すべき課題は、じつに多い。(項目的にも地点的にも)私は、津軽、木造町方言の調査につとめてみて、今、ようやく、津軽方言の深淵のふちに立ち得た思いである。これからなさねばならぬことのいかに多いことか。

津軽方言の認識をささえとしては、さらに、全東北方言に、理のとおった精査の手をのばさなくてはならないことである。ひいては、このような純粹音声言語研究の作業が、全国諸方言についてなされることが望ましい。

津軽方言は、私どもに、そのような全国作業——全国をおおうての新しい音声言語探究——の重要性を教えてくれる。

—了—

本研究は、39年度文部省科学研究費の恩恵によるものである。

(1964・10・4)

昭和39年

(国語学教授)

A study of the Tsugaru Dialect

Yoichi Fujiwara

The Tsugaru dialect is spoken in the northernmost district in Japanese Mainland. This dialect is, therefore, worth notice as representing the

(2)

northernmost aspect of the Japanese dialects.

The Tsugaru dialect with its novel characters and peculiarities is well contrasted with the southernmost Japanese dialect, i. e. the Kagoshima dialect, with its own peculiarities. To study each of these two polar dialects, comparing one another, is very important for the explanation of the whole status of the Japanese dialects.

Now, standing on such a large viewpoint, the present writer has been occupied in the study of this northernmost Japanese dialect.

The Tsugaru dialect is very difficult to understand for the common Japanese people. Why is it so difficult to understand? To answer this question, the present writer describes in this paper the various peculiarities of this dialect. He treats them from the sides of 1) pronunciation, 2) vocabulary, and 3) grammar, and finally 4) he lays emphasis on "the entire sonority of dialect expression". He also divides each item into some smaller sections to explain the facts better.

Thus occupying himself in the elucidation of the Tsugaru dialect, the present writer thinks that dialect study must be the study of dialect as a phonetic language. The field of dialect is entirely the field of phonetic expression. Dialect researchers must always explore scrupulously the field with the delicate spoken sound.

Dialect must be studied as a purely phonetic language. To promote scientifically the task of analyzing the purely phonetic language is indeed our central subject. The more, however, one looks hard at the dialect as purely phonetic language, the better one will acknowledge that arbitrary analysis is never permissible.